和魂漢才から和魂洋才をふりかえって

今年開かれる愛知万博のテーマは「自然の叡知」となっています。環境問題が画期的な変換の時代になっていることを告げています。当センターは、昨秋、世界のエネルギー環境問題の台風の目ともいうべき中国へ調査に行きました。中国の経済、環境状態に日本は直接重大な影響を受けます。日中の相互依存は決定的になっています。

日本は有史以来漢字文化圏の一員でした。平仮名が確立した平安初期、日本人のアイデンティティーが自覚されるようになったとき、菅原道真は「和魂漢才」という言葉を残しています。以来明治維新まで千年以上もの間、中国が唯一の先進国で、和魂漢才がモットーでした。この漢才はたんに先進の知識にとどまらず、場所を超え時代を超えた普遍性があった。例えば儒教は、フランス革命を準備したヨーロッパ啓蒙思想に大きな影響をもたらしています。儒教自身が啓蒙の原理ですから。

明治維新もまた儒教道徳を学んだ志士たちによって遂行されました。明治になって、森鴎外などによって和魂漢才のアナロジーとして和魂洋才が提唱され、この洋才によって日本は近代化をなし遂げ、今度は日本が先進国になりました。

しかし、今でも中国の第一級の青年達は日本ではなく欧米を目指す傾向にあります。そして両国の政治の間には靖国問題が起こっています。

明治日本が近代化する過程において、昔から民衆に浸透していた各地の民俗的信仰や民衆宗教団体とは別に、国家神道というものがつくられました。この国家神道は、その社会的精神的構造において、現代のイスラム原理主義と似ているといわれます。

第２次大戦の結果、国家神道は、偏狭で諸国に災厄を及ぼしたとされ、政治と宗教の関係は憲法でも政教分離が原則とされました。

伝統と宗教は大事なものですが、それらが権力を伴わず、開かれたシステムであることが先進国の流儀だと思います。

当センターは遠慮なくものをいう系統に属しています。津本陽の小説「不況もまた良し」に若かりし日の当センター理事　田中里子先生が登場しています。田中地婦連事務局長の厳しい注文とそれを受け入れた松下幸之助の度量が結局良い結果を生んだことが紹介されています。このような女魂女才に学んでいけば立派な先進国になれそうな気がします。

（2005.01「社団法人　くらしのリサーチセンター」賀詞交換会あいさつ）